宝の海から

白浜で出会った生きものたち

⑤1

京都大学助教授　久保田　信（京都大学瀬戸臨海実験所）

熱帯系ゴキブリが漂着

夜、家の中を走り回り、怪しく黒光りするゴキブリ。女性の方には害虫として忌み嫌われ、発見されると目の敵のようにたたきつぶされる。

しかし、ゴキブリは「生きている化石」とも言われ、人間の現れるはるか昔3億年ほど前から登場して以来、ほとんど姿を変えずに生き残っている。大半の種類が森林の中でおとなしく暮らしているが、例外的に一部の種はおう盛な適応力で人間の生活域に進出している。丸めた新聞紙やスリッパでつぶされる「生きている化石」はゴキブリだけではないだろうか。

◇

ゴキブリは熱帯から温帯域にかけての全世界に3700種が確認されていて、わが国ではクロゴキブリやチャバネゴキブリなど約60種が生息している。

京都大学瀬戸臨海実験所近くにある通称『南浜』では、8月下旬から10月上旬にかけて相次いだ台風接近の置き土産だろうか、熱帯に生息する珍しいサツマゴキブリが初めて漂着した。

このサツマゴキブリは死んでいたが、砂浜の満潮線付近に打ち上げられたさまざまな漂着物に混じっていた。体の一部は破損し、脚は2本だけしか残っていなかった。体長37ミリの小判型の体は黒褐色で、頭部に特徴的な黄白色の縁取りが背と腹側にある。

サツマゴキブリは、もともとはこのあたりにいないのだが、どこからどうやって流れ着いたのだろうか?。その一つの可能性が、海表面に浮かぶ漂流物につかまったり、その中に潜んでいたりして、潮の流れのままに、本来の南方の生息地から遠くはなれた北方の海岸へ流れ着くことである。

サツマゴキブリが漂着していた瀬戸臨海実験所すぐ前の「南浜」

通称「南浜」に漂着したサツマゴキブリ

相継ぐ台風で昆虫も受難

生きたままたどりついて、そこが居心地のいいところだと、定着可能となって分布域の拡大となる。日本では黒潮伝いの四国、九州にも生息しており、これを裏付けている。

すさみ町の海べりに生息するサツマゴキブリは、黒潮に乗って、流木とともにはるばる南方から流れ着いて住みついたしれない。

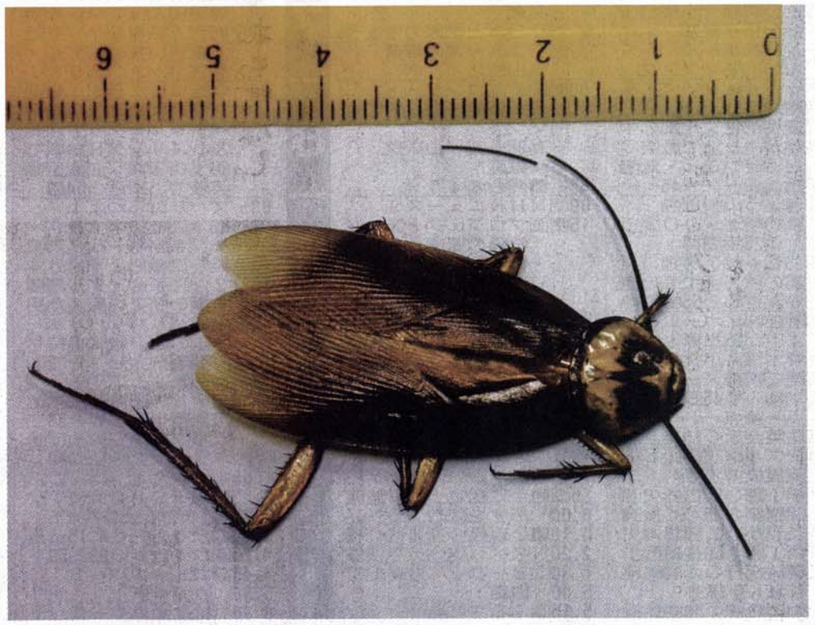
サツマゴキブリは羽が退化して消失しており、普通のゴキブリと異なって飛ぶ力がまったくない。あちこちへ散らばって分布を広げてゆく力が弱い種類だ。県内では、これまで自然林内では発見されておらず、人の影響が大きい場所で採集されているので、例えば、熱帯系の植物を持ち込んだ時にいっしょにまぎれこんでやってきたのだとも推察される。今はもうなくなってしまったが、太地町くじらの博物館に隣接した植物園で、サツマゴキブリを採取したことがある。

◇

サツマゴキブリは、白浜町では1999年から発見されはじめたと、故・後藤伸先生が「虫たちの熊野」（紀伊民報社、2000年発刊）で記録されている。筆者も町内でサツマゴキブリを採集したことがある。それは02年7月で、江津良の海岸道路上で1個体がはっているのを見つけて捕獲した。

サツマゴキブリが町内にどれだけ広がっているのか気になるところだが、おそらく昨今の温暖化で住みやすくなっているのであちこちに殖えているのではないだろうか。だとすると、今回のサツマゴキブリの『南浜』への漂着は、黒潮にのってはるばる南方から漂流してきたのではなく、台風の悪天候で町内から海へ流された結果だと推察もできる。

◇



白浜町のあちこちをはいかいする熱帯性のワモンゴキブリ

白浜町では、他の熱帯系のゴキブリ類として、ワモンゴキブリをよく見掛ける。瀬戸臨海実験所内にも住んでいて、私の研究室や水族館でも捕まえたことがある。9月に実施した京大や他大学の実習生を夜の水族館見学に案内した時も見掛けたくらいだ。

この9月上旬と下旬に、白浜町堅田にあるアパートの部屋によく出没する変わったゴキブリがいると、知人の葛山和久さんが捕らえてもってきてくれた。どちらもワモンゴキブリだった。筆者は、瀬戸漁港をはじめ、牟婁の湯の入り口やカラオケ屋さんの入り口など、実験所構内以外の白浜町のあちこちで見つけている。きっとワモンゴキブリは町内のいろいろな所に潜んでいるであろう。

これら2種の熱帯系のゴキブリの生息記録は、樫山嘉郎さんといっしょに南紀生物誌44巻（2002年）で報告した。地球温暖化が進行している中、2種とも白浜町内はもとより、県下全域に分布を拡大する可能性がある。

◇

台風22号が10月9日に当地に来襲し北浜は大荒れである。そしてまたもや中旬になって23号が日本を縦断し、史上初記録を更新しつづけ10番目（過去最多は6回）の日本上陸となった。そのため今年は異例で、当地も台風の影響をずっと受けており、シュノーケリング観察がさっぱりできていない状態だ。